



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アトピー性皮膚炎（重症成人型）の漢方治療
Author(s)	桜井, みち代; 本間, 行彦; 與澤, 宏一 他
Citation	漢方の臨床, 52(10), 1567-1573
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44242
Type	journal article
File Information	52-10.pdf



アトピー性皮膚炎(重症成人型)の漢方治療

札幌市・北大前クリニック

桜井みち代・本間行彦・興澤宏一
大塚吉則・八重樫稔

緒言

アトピー性皮膚炎 (Atopic dermatitis: 以下ADと略す) とは、日本皮膚科学会の定義¹⁾によれば、増悪、寛解をくりかえす、掻痒のある湿疹を主病変とする疾患であり、患者の多くはアトピー素因を持つとされている。

ここでアトピー素因とは、①家族歴、既往歴に気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎のいずれか、あるいは複数の疾患を有す、または、②IGE抗体を産生しやすい素因、のことである。掻痒を伴い、年齢により特徴的な皮疹の形態と分布を示す。すなわち乳児期では頭部、顔面に渗出性の紅斑や丘疹、鱗屑をきたし、次第に体幹、四肢に下降する。幼小児期には肘窩、膝窩に紅斑や丘疹、苔

癬化がみられる。成人になると上半身に皮疹が強い傾向がある。以前は小児に多くみられ、成長とともに治癒にむかうのが普通であった。しかし、ここ20年前頃から、成人に多く見られるようになり、かつ治療のもつとも根幹をなすステロイド剤が無効の症例が年々増加している。

そのような難治性の成人のAD3症例に対し、漢方治療を試み、有効であったので、報告する。

症例

症例1 33歳、女性。

既往歴…小児期よりADとアレルギー性鼻炎あり。喘息はない。19歳まではステロイド外用剤を使用していた。その後、後きかなくなり、毛深くなったりしたため、ステロイド剤

の使用をやめた。23歳から4年間はまったく皮疹なく治っていた。30歳から徐々に再発した。

現 症…161 cm、53 kg。I g E 25、000、ヤケヒヨウヒダ二十五、コナヒヨウヒダ二十五。WBC 8100、好酸球11%、LDH 692。冷え症。便秘がち。生理痛はひどくない。生理不順あり。肩こりする。汗はかかない。左下腹部圧痛。

初診時、顔面紅斑著明で、浮腫がある。全身の皮膚も赤く、ガサガサに乾燥している。(図1)

十全大補湯＋黄連解毒湯＋猪苓湯(エキス剤はみな標準一日量を使用。以下同様)

1ヶ月後、顔の赤みがかなり減少し、うすくなった。胸の紅斑もよくなってきた。

2ヶ月後、顔の紅斑はほとんどれ、きれいになった。かゆみは顔にはないが、手や腕は寝ている時にかいている。しかし、かゆみは治療前の半分になった。足の冷えはある。この後、同じ処方をもずっと続けた。

8ヶ月後、お化粧もできるようになった。

10ヶ月後、急に手から肘まで悪化して、かゆくなった。十全大補湯＋十味敗毒湯 2週間、かゆみおさまる。

1年後、生理前はおかゆくなる。目の回りや首あかくなり、生理くると治るのをくりかえす。生理不順はよくなったが、

ときに早まる。桂枝茯苓丸加薏苡仁＋三物黄芩湯に変更。これでだんだん手背の苔癬化よくなってきた。

1年3ヶ月後、夕方になると、くしゃみ、鼻水がとまらない。十全大補湯＋当帰芍薬散に変方。これでくしゃみとまる。

1年半後、ほぼ治癒したので、漢方治療うちきる。

症例2 29歳、女性。

初 診…平成8年10月16日。

生後7ヶ月より発症。小中高校生の時は発汗部のみに湿疹がみられた。20歳のとき、第一子出産後より徐々にひどくなり、浸出液も出るようになった。強力なステロイドの外剤を主とした治療を続けているが、効果なく、セレスタミン4錠/日の内服でもよくなりたいため、漢方治療を希望して受診した。

家族歴…父喘息。母アレルギー性鼻炎。

既往歴…喘息はない。アレルギー性鼻炎あり。

現 症…160 cm、52 kg。全身紅皮症の状態(図2)。全身から浸出液がにじみでている。2ヶ月前から毛がよく抜けるようになった。寒気をうったえている。腹証ではお腹はやわらかくへこんでおり、力がない。手掌には小水疱もみられる。生理痛が強い。39度の発熱。顔面、上肢に膿痂疹様の

図 1



初診時

2カ月後

図 2



初診時

半年後

皮疹みられた。皮膚からの細菌培養にて黄色ぶどう球菌検出。WBC 12,700、好酸球26%、LDH 640↑、IgE 6,500、ゲニ+6。

入院してセフェム系の抗生剤の点滴をしながら、漢方治療を開始した。十全大補湯+黄連解毒湯。ニボラジン2錠/日。外用剤はプロベト(ワセリン)とアズノール軟膏を使用した。

1週間後解熱し、皮膚症状はやや改善して退院。顔面紅斑著明のため、治頭瘡一方+黄連解毒湯に変方。

2週間後脱毛がとまった。しかし、ふけ多く、痒みが強い。皮膚に丘疹、乾燥がめだつようになった。眩暈、くらくらする、と訴える。偏頭痛あり。寝汗かく。消風散+桂枝加黄耆湯を処方。これで浸出液がでないようになった。また顔の紅斑もやや軽減してきた。

3ヶ月後、消風散+黄耆末3gに変方。この処方にしてから、徐々に改善してきた。同じ処方を2年間続けて終診。

治療1年後には、WBC 8600、好酸球1%、LDH 265に減少したが、IgEは13,560に上昇した。

症例3 36歳、男性。

初診：平成14年12月17日

既往歴：家族歴：喘息や鼻炎なし。

現症：3歳からAD発症。かゆかったが、医者にはかかっていなかった。25歳、顔に紅斑。医者にかかり、顔だけにステロイドの外用剤をぬっていた。27歳、徐々に全身にひろがる。健康保険がなくて、30歳から医者にかかれなかった。33歳、近医で漢方治療うけ、少し改善。36歳、全身赤黒くなり、浸出液がひどい(図3)。かゆい。苔癬化、全身皮膚の乾燥、著明。下肢に浮腫。寒気。

178cm、68kg。汗がじとじと出る。寝汗が出て体がほてってぬむれない。全身重だるい。食欲はない。うつむいて、小さな声で話す。口渇あり。ウーロン茶1L/日のむ。下痢しやすい。風邪ひきやすい。舌胖大、紅。白苔厚い。腹部はついている。脈やや数。

初診時：補中益気湯+三物黄芩湯+猪苓湯、アタラックスP 3カプセル/日。外用はプロベト。

2日後：痒みが増してひどくなったので、地黄のはいった三物黄芩湯をやめて、黄連解毒湯に変更する。

1ヶ月後：よくなる。寒気あり。全身浸出液でて、体がだるい。排膿散及湯+黄連解毒湯+猪苓湯

2ヶ月後：浸出液は減ったが、かゆくて体が熱くて眠れない。汗も出る。しかし、全体的には赤みがへり、皮膚の表面もややなめらかになって、よくなっている。舌苔は薄くなり、舌はしめっている。脈はやや数。



初診時

1年後

3ヶ月後、滲出液は止まり、非常によくなってきた。躯幹の皮膚はまだ薄く赤いが、表面はさわるとざらざらしくなった。頭部はまだ白く、鱗屑認める。下肢はまだ乾燥してざらざらし、むくみもある。舌黄白苔。汗まだ出る。

5ヶ月後、かなり落ち着いてきた。

1年後、改善してきたが、まだ自汗あり。排膿散及湯+桂枝加黄耆湯+猪苓湯

これで汗が少なくなり、皮膚の状態も大分落ち着いてきた。

考 察

長い間続いた重症のADの患者は、(1)体格はいいのに、お腹はへこんで力がないことがしばしばある。そして寒気を訴えたり、下痢しやすく、疲れやすい、不眠、食欲不振、元気がないなど、気虚や血虚の症状を伴っていることが多い。また、(2)皮膚は赤黒く、乾燥して、痒みが強いことより風熱症と考えられる。さらに、(3)滲出液や顔面、耳介、四肢に浮腫がみられることも少なくない。すなわち水毒の存在が考えられる。

以上のことより(1)、(2)、(3)に対し、それぞれ、補剤、清熱剤、利水剤が必要となる。

補剤としては、十全大補湯や補中益気湯などの補剤を使

用するが、十全大補湯は四物湯を含むことより、血虚、すなわち皮膚がかさかさしている時や、反対にどろどろの時にも効果が⁽²⁾あり、補中益気湯は気虚の症状が著しいときや寝汗がひどいときに効果がある。清熱剤としては黄連や黄芩、石膏、大黄などを含む方剤を使用する。黄連解毒湯、桔梗石膏、消風散、白虎加人參湯、桃核承気湯、茵陳蒿湯などがある。⁽⁴⁾黄連解毒湯はかゆみ止めの漢方薬と思ってもよいほど、かゆみと紅斑をとる一番の妙薬である。排膿散及湯も軽い清熱作用を有するので、化膿傾向の有無にかかわらず、A Dに頻用している。山田光胤先生がよくA Dに桂枝加黄耆湯加荊芥、連翹を処方されるが、エキス剤でいえば、桂枝加黄耆湯+排膿散及湯がこれに相当するのではないかと思っている。

利尿剤としては猪苓湯、五苓散、五淋散などをよく使用する。紅斑の強い場合、一見皮膚表面は乾燥していても、耳介や眼瞼はむくんで腫れていることが多い。ガサガサに乾燥した皮膚の真皮では炎症細胞の浸潤と浸出液がたまっているので、その水を猪苓湯でとりのぞくと、皮膚炎がおさまり、乾燥感もとれてくる。また猪苓湯の中の滑石は清熱作用があり、発赤をとりのぞく作用がある。⁽⁴⁾また、越婢加朮湯は利尿作用と清熱作用の両方があり、使いやすい方剤

である。ことに眼瞼浮腫や結膜炎があるときは著効する。1例目は以上のような観点から十全大補湯+黄連解毒湯+猪苓湯より治療をはじめた。初期の急性期をすぎ、症状が落ち着いてくると、患者本来の症にしたがって本治(桂枝茯苓丸や当帰芍薬散)と、標治を組み合わせた治療法に行した。

2例目は、初診時寒気をうったえていたが、その後は春でも襟の広くあいた服を着ており、本来寒証ではないと考えられた。そのため石膏の入った消風散があつたのである。またよく汗をかくので、黄耆が奏効したと考えられる。

3例目は全身紅斑、熱感より熱証を、また、体の熱感(ことに午後、のぼせ、不眠、寝汗、口渴より虚熱を、汗ばむ、寝汗、風邪ひきやすい、下痢しやすい、食欲不振、元気がない、小声、疲れやすい、舌胖大より気虚を、浮腫、浸出液、全身重だるいことより、水滯が考えられた。

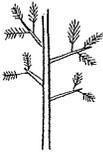
この中でも気虚が一番の特徴である。脾気虚により気の生成が不足して肺気虚から衛気虚となる。さらに推動無力による気滯や痰湿、水腫をひきおこしたものと考えた。そのため、黄耆建中湯や補中益気湯などで気虚、脾気虚を補い、猪苓湯で水滯を、黄連解毒湯や排膿散及湯で清熱をはかった。

エキス剤をつかった漢方治療は原則的には1剤で治療すべきであるが、重症のADは1剤では治療効果を挙げることは難しく、2剤ないし3剤を使用せざるをえないことが多い。2週間ごとに経過をみて、1ヶ月たつても変化ないときは変方するようにしている。

ADの治療法として、日本皮膚科学会はステロイド剤やプロトピック軟膏を推奨しているが、それで良くならない患者には漢方治療は試みるべき治療法であると思う。

〔文献〕

- (1) 古江増隆ほか・日本皮膚科学会アトピー性皮膚炎治療ガイドライン2004改訂版。日本皮膚科学会雑誌114:135-142、2004
 - (2) 花輪壽彦・漢方診療のレッスン189-200頁、金原出版
 - (3) 山田光胤・筈庵治験。活 2004年4月号、5月号、6月号
 - (4) 森雄材・漢方処方の構成と適用128-129頁、医歯薬出版
- (医師・〒060 0814 札幌市北区北14条西2-5 メルバN14-2F)



 田辺製薬株式会社



生薬三十一種配合 医薬品

ナンパオ®

【効能】 中年期以降における
疲労倦怠感を伴う腰痛・肩こり
【用法・用量】 成人1回2カプセルを1日2回、
朝晩食後に服用

●商品についてのお問い合わせは、
田辺製薬(株)「お客様相談センター」
☎0120-54-7080
(弊社営業日の9:00~17:30)

●www.tanabe.co.jp/nanpaou/

Gentlepharma
キキメとカラダのグッドバランス

続ける生薬、
続く元気。
生薬31種の
効き目を、
カプセルに。